

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

比留間 洋 一

序

本稿は、ベトナム北部ハノイ近郊Yむら¹⁾における主に1997年～1998年のフィールドワークから得られた資料に基づき、むら祭り hoi lang と父系親族集団ゾンホ²⁾の関係の変遷について概括的に報告し、最後に若干の考察と問題点を示したものである。

未確認の点も少なくないが公表する理由の1つは、1997年～98年、2000年～2001年の調査時点において、むら祭り、ゾンホに関する記憶の消失や復活・再編の動きがすでに顕著にみられ、かつその後も調査地が高度経済成長の渦中にあるので、いったん当該時点における状況を現在の学術的態度から記述することが急務と考えたからである³⁾。

もう1つには、ゾンホに関する具体的記述を提供することがある。ゾンホに関しては、(末成1998)が、ハノイ近郊Tむら(Yむらと同じ社に属する、隣むら)の具体的資料に基づき、東アジアにおける比較の視点からその構造的な特徴を抽出し、建て前上は公の場面で前面に出されることはないが、様々な場面で個人にとって重要な紐帯であることなどを指摘した。その後、(宮沢1999)が、バクニン省の1つのむらの事例報告によって、ゾンホが末成の調査村のように機能していない様相を提示し、末成モデルがどの程度一般的に有効であるかという問題提起をおこなった。それら以外には、南部に関する報告(中西1998)や歴史的論考(嶋尾2000)を除いては、目立った進展がみられない。問題は、こうした現状では、Tむらが有名な伝統村ゆえに

1) Yむらの概況については、(比留間1990) 参照。

2) ゾンホあるいは単にホと言われ、とくに何某一族という場合は、「ホ何某」と表現される。本稿でも、ホTといった具合に表記する。あるいは、断る必要がない場合はホを省略して単にTとのみ記す。また、TVTという名前の表記は各々、ゾンホ名・ミドルネーム・ファーストネームを表す。

3) ゾンホ、むら祭り、むらの歴史の全体像、用語解説については(末成1998)を参照。

例外的にゾンホが発達しているのだ、という理解がなされてしまう危険性が存在することである。ここに、Yむらのようないわば平凡なむらにおけるゾンホの重要性を提示する意義が存する。つまり本稿の位置づけは、末成、宮沢に続き北部の1村落社会におけるゾンホを取り上げ、とくに末成のいう、ゾンホが様々な場面で重要な紐帯となっている様子を、むら祭りに即した具体的記述をもとに描き出すことになる。

また、むら祭りまたは儀礼をめぐるこれまでの研究は、国家と村落との関係のみに議論が集中していたきらいがあった⁴⁾。それらは先行研究に譲り、本稿は、そこでは捨象されがちであった、村落内部の多元的な声をよりいっそう浮き彫りにする試みでもある。

以下、3つの章に分けて、時間軸にそって述べていく。なお本稿の人名は一切仮名である。

1. むら祭りの復活以前

この章では、むらの守護神の起源から1980年代の復活の動きの前までを、3節に分けて記述する。

(1) 守護神の起源から郷約の書かれる1916年以前まで

この節での主たる資料は、むら人の経験に基づくものではなく、いわば伝承(相伝)^{トロンチュエン}である。

・守護神の起源について

50歳以上の男性たち数人から、大同小異の伝承が得られた。

廟^{ミウ}またはデンのあたりに、リンランLinh Lang大王が、中国宋軍を撃退すべく、水軍を駐屯させた。むら人は、バインドウックbanh ducという米からつくった食物を兵士に提供した。バインドウック ドーブイ do bui (Yむらの俗名^{デンノム})という言い方があり、かつてバインドウックはこのむらの一種の名物であったという。リンランが亡くなった後、旗が全国各地に飛び、旗の着いた場所ではリンランを祀った。その1つにYむらがあった。

4) 儀礼をめぐる国家-村落関係については(Kleinen1999)(住村2000)(Malarney2002)などがある。祭礼復活における行政の動き(法令、規制含む)については(松平編1990)を参照。

・むらの移住とゾンホについて

50歳以上の男性たちで移住伝承を知る人は少なくない。ただ、移住元は明瞭だが（^{ソンニョエ}鋭河沿いの地で、現在もYむらの地分）、時代は不明瞭で、バーさんDTB（廟堂守）でさえ、移住を黒旗軍の襲撃（1882年）から避けるためだった、と話した。さて、そのさいに移住した草分けのホについて、大きいホho to（以下、大ホと略記する）の人は草分けを4つの大ホ（T, H, D, V）とし、ホNの人はNを加えて5つのホだと語った⁵⁾。なお現在、4つのホは概ね数百の^{スアットディン}出丁（男性成員）、十数代の世代深度を有するのに対し、それ以外の主要な小さいホho nho（以下、小ホと略記する。主要な小ホはN, Ti, D2, V2と表記する）は数十の出丁、十代未満に限られる。互いに別々のホであって父系血縁関係のないNがむらに3、4あり、以下N1, N2, N3と表記する。以下は大ホの人びとの話を総合したものである。

移住の際、4ないしNを加えた5つのゾンホが、それぞれ特有の場所を占めて、住みわけることとなった。昔は、ソム⁶⁾・マーカー（大きい墓の意）にはホTが集中しているというような状態を表して、ソムホxom hoということばもあった。Lというゾンホもいたが、いつごろかは不明だが、神聖なる廟の門の向きを変えたことで、ゾンホが途絶えてしまった。

ほかのホは後から来た。^{グク}寓居で来た。寓居というのは、むらへ一定のお金le langを納めねばならず、もしそうしなかったら、^{ディン}亭に出られないし、亭で食べられない。また（寓居は）^{サックフオン}祭礼で勅封を神輿で担ぐruoc sacときに、雑役をせねばならない。たとえば、ござを敷く、お盆を運ぶ、片付けなど⁷⁾。

小ホの古老または族長とされる人物などにも、それぞれの自らのゾンホについて話を伺い、以下のようなことがわかった。

ホHTについて、タインホア（地名）からこのむらにやってきた漢字先生がおり、「このむらのホHの娘と寝て、孕ませた。恥ずかしくて田舎へ戻った。」その女性の子供は母親の姓、つまりHをなのった。数百年前の話という。ホHT（ミ

5) 一人だけ大ホの成員でNを加える人がいた。大ホといえばYむらではT,H,D,Vを指し、またこの順序が慣用表現となっている。

6) むらlangは、地理的にソムという下位単位に分けられる。Yむらには5つのソムがある。

7) むら祭りをめぐる区別も、むらに籍を置くかどうかという「内籍」「外籍」意識として扱うことも可能だが、おそらくそれでは行政的、形式的な側面に制限されてしまう。少なくともYむらに関してはホの問題として扱うことによってはじめて生活者としての意識を明らかにすることができると筆者は考えている。

ドルネームにタインホアのタインを付けた) と呼ばれている。聞き取りでは、V2, Tiもタインホアから出てきたという。なお大ホではTの家譜のみに出身地(やはりタインホア)が明記されている。

他の小ホは、現在が何代目か、現在の成員数、支派数などについては聞かれたが、ホHTのような伝承は有していなかった⁸⁾。ただ、若干性質は異なるが、N2の人から以下のような話を聞いた。もっとも、この話は、H2以外の大ホを含む数人からも聞かれた。

(1882年—この年次はハンノム院Nguyen Ta Nhi先生の推測による) 10月20日、黒旗軍が鋭河を渡って襲ってきた。周辺のみらとともに、Yからも(一説では20人が) 戦闘に出ていった。N2 VCによれば、亡くなった人のなかにホNもいた。ホNでは今日でも命日に祀っている、という。

(2) 1916年から1945年の革命まで

この節で扱う時代は、長老たちも当時はまだ甲で祭礼の担当をする年齢に達していなかったなど限られた話が聞けるのみであったが、それでもサウさんDVN、バーさん(カンビエンを経験。カンビエンについては後述)の話が聞けたのは貴重であった。記録では郷約^{フオンウック}(むらの成文法、Yむらのものはチュノムで書かれている)(1916, 1928, 1934a, 1934bの各年) および『神跡神勅』(1938年)(フランス極東学院の調査に対する回答、Yむらのものは国語^{タンティックタンサック}で書かれている)が、ハノイの図書館に残されていた。以下、甲とむら祭り、ゾンホとの関係について、記録類は表(資料参照)とし、主に聞き取り内容を記述していく。

・Yむらにおける甲の概要

記録類の「八甲」という記述は、聞き取りでは不詳である。ただその聞き取りの際、革命以前は大ホと小ホの間での区別が大きかった、という話題がよく出てくる。また、甲の役割は祭礼と葬送⁹⁾であったと言われる。以下、その2点の内容について述べていく。

まず甲の役割に関する話を総合すると次の通り。生まれたら赤ん坊から甲に所属し、

8) 文字記録について、筆者の知る限り、最古の年次は守護神に関するクサック神勅にある1626年で、それは1924年まで計38回各皇帝から与えられているが、筆者は実見していない。各ゾンホに関するものでは、Vの1861年の碑文のほか、家譜は主要なもの(1861-1932年ころに書かれたV,R,Hのものは入手できたと思うが、未見のものもいくつかある。

9) 拙稿(比留間1998)で、甲について触れていないのは、ホと甲とがしばしば同一視されることによる。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りとお系親族集団の変遷

村祭り初日（入籍）^{ニャップティック}の「甲の事」での宴会料理の取り分chia phanもあるが、実質的には18歳で加入し、若者として、祭礼で祭具、ごぎを運ぶなどの服役をする。甲のなかには高年者と年少者の2階梯に分かれていた。60歳以上は祭礼を担当。持ち回りで1年当番の甲があり、祭礼、亭、祭具の世話をした。当番甲は、カイダムを1人選出（50歳以上）。カイダムはむらの田んぼを耕作し、その1年の毎月の朔望と各節句に供え物を用意して礼拝をおこなった。またカンビエンcan bien班とは、各甲（バーさんは、たとえば大ホなら2人、小ホなら1人と説明）の代表8人（40歳くらい）からなる人びとの集まりで、むら祭りや新米・新餅米（嘗新祭）のような大きな節次に、専門に礼物を用意した。さらに一種の賤民であるモーがおり、祭礼で給仕など召使をした。

・甲とホの関係について

大ホの立場からは、サウさんの話が最も具体的であった。小ホの人びとの説明は、かつては大ホと小ホと差があったが、革命以後は実力主義になったという言い回しは一致していたが、2人の老人の話のなかの細やかなニュアンスは注目に値するので、下線を引いた¹⁰⁾。

（サウさん）（郷約に記載されている「D中甲」という名前の甲について）もともとDが1つの甲を形成していたが、長支（長男系支派）と、次支（次三男系支派）とのあいだにいさかいがあり、支をわけることになり、別に派甲phe giapを設立。25人で1人^{トックビウ}族表を（郷政会同へ）送り出すことができたが、分派した側は人数が足りなかったため、父（DVB）が、HT、N manh（小さいNの意）、V2の各ホから数家族ずつ買い集めた。甲は寄り集まり、投票数を増やした。何十人かいて、2人の代表を選んだ。こちらに^{リーチュオン}里長、^{フォートン}副総などが集中し、向こう（長支側）にはほとんどいなかったの^{フォーホイ}で副会を譲ってやった。むこうは丁数が足りなかった。亭では1つのホだが、内では2つに分かれていた。郷約にあるDVCは、向こう側の者。第一次大戦中にフランス兵になったので、帰ってきてから優遇され、郷長^{フォンチュオン}となって、ごぎ（役職者らの座席）に座ることができた。本当は何ももっていない。向こう側は、その後も含めて、結局2人だけ。

10) 以下の下線のように、中年層（2人とも50代で亭の活動にまだほとんど参加していない）の発言には2人の老人の発言との間にニュアンスの差がみられた。あるいはNとそれ以外のホとの間に由来するものという側面もある。

（V2）聞いた話では、フェ内で、小ホ同士が連結。フェの田、甲の田があった。

（D2）昔は、大ホ、小ホで差。選挙に際してなど。がいまは社会ではホは関係がない。選挙でも能力のあるものが選ばれる。ただし、ホのなかではかつてと同様。

(N1 VTの姻戚thong giaの老人) 昔は大きな甲が小さな甲を威嚇することがあった。^{チャイントン}正総などむらの要職を占めている大ホが、むらの^{フオンジック}郷役に参加していない小ホ、例えば「甲二」というように。また何か公事があったときに、大ホが権利をもつことがあった。例えば、小ホは、参加はできるが、発言する権利がない、というように。

(N1 VT) フランス時代には、大ホ、小ホで、反目があった。里長などは大ホが独占していた。いまはない。いまは小ホが亭の事などにあまり出ていかないくらい。いまはむらの役職も能力のある者が担う。例えば、副主席をしたTiVDのように。私の支¹¹⁾をN2 VCやN2 VHの支に吸収させる予定があり、名簿も作成したが、若い層が不安を訴え、ある長老が亡くなり、その計画も立ち消えになった。吸収合併していたら、うちのホも大きい。

・この時期の祭主について

郷約では1916年の当番甲による選出から、1928年のむらで最も地位の高い者へと変更がみられる。変更理由は「ふさわしい者を選出できない甲もある」とあり、以下の話もそのことと関連するのであろう。また、長老たちの記憶の中で最も古い祭主であるHQDとVVH（後述）は、おそらくその変更後の祭主であろう。

祭主を吟味する者が両脇に2人いて、（儀礼の所作を）少しでも間違えたら、太鼓をならして、^{レーク}謝礼（儀礼）をさせた。今は間違ってもいい。

・昔からむらのなかはH、より上級の役職はTという認識がある

^{パンチー}文址（1860年）に記載されている名前のホ別の割合をみて、何人かがそのことを再認する場面もあった。ある人がいうように、むらのなかでは里長やカンビエンのような役職者の座席に座ることができることは名誉であった。がTVBは「ホTは、里長のようなフランスの手先である下級の役職にはつかなかった」と言っていた。

関連して以下のような伝承がある。以下と註¹²⁾の話をしてくれたホTの古老2名以外に、ホT以外の人で知っている人もいた。

-
- 11) むらにあるいくつかのホNは1つのゾンホではないという意識が一般的である。この長老は支という表現を漠然と用いているのであろう。ただそうした漠然とした用法自体はかなり一般的でもある。
- 12) あるいは次のように語られた。（ハイさんTVT）この人の役職が高かったので、翁たちが恐れて、栄帰させなかった。また、この人が栄帰する際、ホTに神輿で担がさせなかった。そのため、妻の故郷に住んだ。3代目の子孫がまだ健在で、1人はハノイで、財政省の副大臣を務めた。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

(その祖先は) ホTの乙支の人で、(科挙で) ^{フォーバン}副榜に合格し、朝廷で仕官し、爵位を与えられた。むらに栄帰する際、むらに伝えただけで、クアンホ (ゾンホのこと) には伝えなかった。むらの ^{リージック}里役たちに裏門で迎えてくれるよう依頼し、クアンホには話を通さなかったので、ホは彼をホに入れさせなかった。それで、ラムドン (地名) に住みつづけた。なお今日、墓もそこに所在し、ホの忌祭にはそこから子孫が参加しにくる。

(3) 1945年から復活直前まで

この節で扱う時代では、とくに土地改革の影響やむら祭り関連物の破壊についてなるべく細大漏らさず記録することに意味がある。研究史上、評価が分かれ、むらごとの偏差が大きかったともみなされているからである。記録では、1957年ころの文書がこの時期のこの種の文書はおそらくこれまで紹介されていないので貴重であるが、紙幅上、注において梗概を示すに留まる¹³⁾。なお以下の出来事はいずれも複数の方からの話を総合したものなので、左端のスペースをとらない。

1945年ころ、社会が混乱していたとき、Tむらの若い男女からなる「^{ザックデン}黒い敵」が、このむらが亭から廟へ神輿を担いだ後、亭に戻った堂守を拘束して、太鼓、赤、白の馬を強奪。むらのはずれで解放したので、こちら (Yむら側) は何もできなかった。こちらの (むらの) 人数が少なかったから、恐喝されたのだ、という。

1945-47年ころは「^{クムチエン}暫戦」と呼ばれる時期で、フランスが再来し、一時戦争状態となった。V2の者が、次いでVVBが祭主をつとめた。後者について、当時をよく知るバーさんによると、大ホの1人でもあり、それなりの人でもあったので、新しい ^{ホイドンフォンチン}郷政会同で選出した、という。

1947-54年ころ、フランスとベトミンの抗戦時期、Yむらのあたりは「^{ブン}^{デー}敵の地域」となり、フランス占領下にあったと言われる。この時期に、2, 3年神輿行列がおこなわれた。この時期の正総はHQD、里長がHVVで、里長はこの7年間に、2期里長

13) 祭主選定報告書、祭具管理の祭主への委託書は、むらの長老たちが作成し、社の人民委員会に提出、許可を受けたもの。他に、堂守が作成し長老たちへ提出した銅製品を売った旨の文書。委託書には、やぶれたごとの枚数までの祭具全てについて、また、祭具が銅製の場合は逐一その旨が詳細に記されている。また、この文書が復活のさいに活用されたかどうかなどは不詳である。

14) 国家政策として行政単位改組がおこなわれ、Yむらでも、それまでの1むら=1社から、Tむらと2むらで新しい1社へと統合された。

15) ホー主席の写真を神輿で担ぎ、守護神は担がれなかったという話も聞かれたが、不詳。

を務めた。後にこの2人は革命、土地改革のなかで処刑される。

1954年、ベトミンがフランスに勝利し「平和再来」^{ホアビンラプライ}する。Yむらでも、ほかのむら同様、抗仏戦争の傷病兵である2、3人の外来者（中部以南出身）を熱狂的に歓迎して受け入れた。

1955年、トゥーさんVVHが新しい社¹⁴⁾の主席になった。神輿行列が行われた¹⁵⁾。このとき「神輿が飛んだ」kieu bay、つまり守護神が神輿にのりうつり暴走した、という話が人びとに強い印象を残している。以後、1991年の復活まで神輿は担がれなかった。また、昔は亭での受禄^{トウロク}（儀礼後の飲食）は男性のみであったが、平和が戻ってからは女性も敵を討つことに功績があったし聖禄^{ロクタイン}は男女ともに与えられることになった、という変化もあった（TVB）。

土地改革の前に、正総HQDが、むらの革命側の人びとによって捕らえられ、「改造」^{カイトオ}された。さらに、HQDの家のなかにハドン（河東）橋で撮影したフランス統治者の写真が飾ってあったため、告訴されて処刑とされた。

1955、56年、外部の土地改革隊がむらへ来た。当初、地主は3人とされたが、「修正」後みな修正された。例えば、ある女性は「抗戦地主」と修正された。ニャットさんHCP（後述）は改革隊に信頼された一人とされる。

「暫戦」期の里長HVVが捕らえられ、「地主強豪」として銃で処刑された。銃殺されたのは、Yむらで2人いた。もう一人は書記であったNVP。Yむらは農業むらで、私有田は、鋭河の向こう側のCむらの2人が所有していた。つまりYむらは彼らの小作であった。ただし地主、小作の関係といっても、租税をとっていただけで、耕作は自由にできた、ともいう。

改革当初、当時の主席トゥーさん、村長ナムさんHVKらも捕らえられた。革命路線に従っていたのだが、国民党とされ、4ヶ月間牢屋へ入れられた¹⁶⁾。

改革を恐れ、みつかると処罰されるかもしれないという妻の提言に従い、ホTのある者が自宅で保持していた玉譜^{ゴクフー}（神譜ともよばれる）を亭にもっていき燃やした。

HQDの息子HVCは、トゥーさんの前の主席を務め、それまで革命運動に参加していたのだが、改革後、政治が嫌になりchan、主にタイクン（読経師）を行うようになった、という。そして、むらの葬式の儀式をほとんど一手に引き受けるようになった。

16) 次はナムさんの語りである。当時妻は子供を生んで2ヶ月しかたっていなかった。が修正で以前同様にいろいろと活動できるようになった。間違いは、党全体の責任なので、個人的な復讐はしないようにとお達しが下った。数百マウという地主はいなかった。5、10、20マウくらいの地主はたくさんいた。見せしめのため田で銃殺した。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

1957年、NVDが堂守となる。以後71年まで。この間は「祭」儀礼も行われず、堂守が亭を開けて民が礼拝することはあったが、それも少なかった、という（NVDの息子）。

1958年ころ、亭の門を入れてすぐ右手にあった碑文の建物が壊された。廟にも、おおきなダーの木があったが、合作社によって切られた。また廟には神農タンノンの台座があったが壊された。

この間、合作社は亭を「会場」として会議や文芸をおこなった。文芸のために、亭に舞台を設えたりもした。

1972年12月、米軍の爆撃を受けた。人は誰も死ななかったが、2個の爆弾が亭の門の前の池に落ち、（祭具などは）ほとんど何も残らなかった、という（ただし後宮と勅封は残った）。ある人は「昔の亭や各部（祭具）はすばらしいものだった。いまのはみな新しい。」という。

1980年ころにハイさんTVTが亭の堂守となるまで（政府が祭礼を禁止していた間）の堂守は、HVTであった。

2. 1980年代以降のむら祭りの復活過程

この章の資料は、第1に建設班バンエンフイェットメンバーからの、つまり復活を主導した当事者たる老人たちからの聞き取り、第2にその他の人びと（建設班と意識的に距離を置いている人びとなど）からの聞き取りや陰口に基づいている。また記録類としては亭再建寄進関係が主たるものとなる。以下、歴史文化遺跡認定（以下、認定と略記）までの動きと復活過程の2節に分けて述べていく。

(1) 認定へ向けた動きとして、この節では、1980年代初頭から認定までを扱う。

・建設班（後の歴史遺跡班）結成以前

総じて、亭破壊以降、1986年の建設班結成までの間におけるむら祭りについての話は、政府が禁止していた（から話すことは特に無い）、というものである。

1980年ころ、ハイさんが亭の堂守になった。ある人は、ハイさんは父母を早く亡くし、子供たちも別住し、老夫妻のみで、何も心配なことがなかった、と選出理由を説明した。

1982年、Tむらの社寺が、ハノイ市の文化通信局から歴史文化遺跡の認定をうけた。

・建設班結成について

1986年、Yむらに建設班が結成された。メンバー（当時の年齢）は次の13人であっ

た。班長ニャットさんHCP (63)、副班長がトゥーさんVVH (63) と、TVB (61)。守櫃 (会計) がTVTh (51)、書記がVVL (55)。その他に、ハイさんTVT (63)、バーさんDTB (60)、ナムさんHVK (60)、サウさんDVN (60)、HVB (74)、HVC (77)、D2 VU (53)、TVP (63)。

最年長の2人は調査時点ですでに他界していた。HVBの息子は以下のように回想した。

HVCはタイクンを行っており、漢字祭文の作成、祭礼でのその読み上げを担った。父HVBは礼儀について多くを知っており、あらゆることについて指示した。衣装、儀礼、祭具、たとえば剣、龍廷などすべて失われていた。1994年に他界するまで、かつて捨て去ったものを復活させ、亭をつくることに功績があった。復活にはHVB、HVC、ニャットさん、ハイさんの4人の功績が大きい。

1987年、前拝^{ティエンバイ}¹⁷⁾を新たに建てた。亭で「祭」儀礼 (神輿行列なし) が行われた¹⁸⁾。

・認定へ向けての動きについて

HVC、TVBの2人で、ボイフクVoi Phuc (むらの守護神祭祀のいわば総本山、ハノイに所在) へ行き、神譜を写した。TVBによると、「以後、見せないようになったが、実はそうした経緯のある新しいもの」である。Tむらの人である社・文化担当者に漢字の勅封を訳出してもらった。またVVTが、亭のカウドイ (対聯)、ホアンフィ (扁額) を訳出。ニャットさんに渡した。また認定へ向けて、ニャットさんを中心にナムさん、TVThらもたびたびハノイへ出かけて行ったという。

(2) 復活過程として、この節では、認定後から1998年のむら祭り直前までを扱う。

約半世紀ぶりの神輿行列は全村民レベルでの歓喜、熱情を伴ったものであった。しかし、世代、ゾンホなどを軸とする対立、反発の言動もよく聞かされる。それらの多くは陰口のような形ではじめて耳にすることができる話である。

・認定以後の動きについて

1990年、亭、廟、寺が国レベルでの認定を受けた。勅封が残っていたのが大きかったという声が少なくない。また、1955年以来の神輿行列が行われた。行列には龍、獅子舞をも伴った、という。建設班書記VVLによれば、この年と翌91年は豊作で、政

17) 文字通り、亭の本堂手前で、拝礼を行うための建物。Yむらの旧亭にはなかったという。

18) 祭官を揃えての「祭」はこのときに復活したらしい。神輿復活は後年。ハイさんが堂守兼祭主を担った。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りとお家系親族集団の変遷

権の許可もあって、人民の^{コンドック}功德（寄進）が多かったという。また「むらの亭を再建するなんて千年に一度のこと」と話した。このころバーさんが廟の堂守、祭主となった。なお廟の堂守は朝夕に廟を訪れて上香する。亭の堂守は日常生活も亭の一房で過ごしている。

1992年、亭再建。一部増設はあるが、古い建物に近い形とされる。

1993年、亭の門を建造。

1994年、大きなむら祭り（神輿行列あり）を開催¹⁹⁾。

・この間の功德について

むら祭りの経費、再建への功德について、以下は堂守ハイさんの話。

むら祭りの3日間、民が功德箱へ入れる²⁰⁾。祭の終わった日に開ける。普通は余る。余るから、建物の修復が可能。足りなかったら、むらの基金から。だから、亭、寺は全民、客十方を貴ぶ。例えば、ある人が亭の再建のために一人で200万（ドン。以下同様）出すと言っても受け入れない。亭は全民、十方の客で建てた。その後のカウドイなどの内部の飾り物なら、個人でもすぐ受け入れる。（亭の再建に）総額2億。政権が600万。文化省が2,000万、歴史遺跡だから（もらえた）。

また建設班書記VVLの方が所持しているノートに次のような功德収支が記載してあった。おおまかな寄付金額を年度ごとにみると、93年に800万、94年に3,300万、95年に2,800万、96年に1,300万、97年6月20日までに1,600万であった。VVLによれば、稲はここ2、3期は不作気味。その前はよかった、という。

・その他

ここ数年間（1994-1997）の動きや出来事として、以下のようなことがあった。

再建のころからのボイフクへの祭礼参加を通じて、ボンライBong Lai（守護神の聖母が祀られている場所）を知り、同じ守護神を祀るその他の場所の祭礼へも参加するようになった。他に、Tむらなどの近隣のむらとの祭礼づきあいもある。特にボイフク、ボンライへは神輿行列の多勢がバスに乗って参加する。

19) Yむらではハノイ市の規定によって、神輿行列は3年に1回のみと規定されている、と理解されている。VVLは、Yむらでは、神輿担ぎが3年に1回という規定は、豊作など資金面というよりは、人力が主たる問題という。

20) Yむらでは亭、廟に「功德」箱が常時設置されている。堂守へお金を手渡そうとする場合（隣のYむらなどでは堂守自身の収入となる。隣むらで堂守の任期が2年までと制限されているのも、そのためという説明がある）もあり、そういう人がいると、堂守は、すべて功德箱へ入れてください、と伝えている。

捧香礼隊が結成された。隊長TtU(女性)の息子の話では、隊は大変人気があり、とく離婚したある中年女性などはメンバーに加えてもらおうと必死であった。神祭りに参加できることは名誉であり、名誉挽回のため、という。革命以後女性も亭に座れるようになったが、筆者の観察では、亭の後宮については、個人的礼拝の際は女性も入れるが、捧香礼の際は内側に男性の祭官が控えており彼らが供え物を祭壇へ運んでいた。

亭の祭主が、ハイさんからニャットさんへ。1994年ころ。理由はいくつか異なった風に説明される。1つは「堂守として、祭のさいに絶えないようにする上香の役や参拝にきた客の対応もせねばならない。2つの仕事を両立できない」とハイさん自身が提議したというもの。他に、ニャットさんのほうが背が高く見栄え良いがよいというものや、ハイさんはゾンホ内で族長(正確には族長の代役)の立場にあるが、ハイさんの一家がゾンホと祠堂の土地の件でもめていることなどが挙げられた。

サウさんが亭で取っ組み合いの喧嘩をし、以後、亭へほとんど出入りしなくなる。サウさんは筆者と二人きりのときにこう話したことがある。

建設班以来、10年以上もずっと変わらないメンバーでやっている。いまの60歳代など下へ伝えていかねばならないのに、ずっと70代が独占して手放さない。それよりも気に入らないのは、ホが独占していること。特にホH。ナムさんなんか、何も知らないくせに、歴史遺跡班に居座っている。

逆にナムさんも筆者といるときに、サウさんのことを指して、「ホDも小ホ」だと悪態をつくように言ったことがあった。

この話の文脈でVの中年男性も次のように話した。

HとTの独占をよく思わない。とくにDとVが。またホHのなかでもいまのやり方を嫌っている人たちがいる。それで、長老は数百人といえるのに、「村の事」には数人だけ。参加するだけで何も言わないし、何もしない人びともいる。

去年、Tむらの長老が、(昔強奪した—先述) Yむらの太鼓を返すといってきたが、こちらの長老は、「盗まれたものだから」と断り、民の寄付で、いまの新しい太鼓をつくった。ずっと保ってきたものなら伝統的、歴史的な価値があるけれども、盗まれたものだから。それに新しい太鼓をつくる費用はたいしたことがないので、盗まれたものよりいいものを新しくもっているのがよい。もっとも太鼓の質は昔のものには及ばないが、という。なお筆者は未見だが、馬の腹の底、太鼓にも、Yむらの漢字名が残っている、という。

・1997年の主な動き：観察に基づく記述

陰暦2月10日、ボイフクの祭礼（化日）^{ガイホフ}へ約70人が参加。陽暦4月4日、テレビ局が亭を撮影。陰暦3月14日、ボンライの祭礼（母の忌）^{フーメ}へYむらから170人から200人が参加しカウドイ1対を寄贈²¹⁾。陰暦3月15日、70歳の同年会が亭へカウドイを寄進。またVVA²²⁾の家族が廟にホアンフィを寄進。それを掛ける場所をめぐって主にニャットさんとVVAとが亭で議論。陽暦6月13日ころ、亭の門に扉を取り付けた。陽暦7月14日、ボイフクの建物修復関係の会合に、TVTh、ニャットさん、後日の起工式にハイさん、バーさんが参加。陰暦8月12日、長老数名がボンライ（聖母の化日）へ参加。

3. 1998年のむら祭り

この章では、(1)祭礼班メンバー^{バーンテレー}とむら祭り役割分担の構成、(2)観察に基づく1998年のむら祭りについて記述する。

(1) 祭礼班メンバーとむら祭り役割分担の構成

実際のむら祭りに接するこの段階まで筆者は、小ホは亭へあまり行かないといった発言や、むら祭りを主導している人びとに対する反発の声を多く聞いていたため、いまのむら祭りには求心力がないのかもしれないという印象を抱いていた。じっさいのむら祭りの様子は、その印象を裏付けるものであったり、予想外なものであったりした。

予想外なものには、小ホや批判的な人の姿も相当数見られたこと²³⁾、役割を分担した人数のみで200人を超え、さらに当日の亭、廟、沿道などの人手が相当賑わったことなどがある。他方印象を裏付けるものには、小ホのような周辺的な人びとは参加するにしてもやはり周辺的であったといえること、また役割分担名簿に変更が多く出たことが、批判的な声が多いことと一脈通じると思われることなどがある。そのことを具体的に示すためには、むら祭りのなかでも、この節と次節の資料が恰好の素材となる。

21) このための寄付者リストが亭にしばらく掲示してあった。男女の高齢者を中心に計55人ほどが寄付。

22) Yむら出身、ハノイ市内居住者。土地を売って大金を得たという。この時期に多く寄付を行い、亭、廟の祭礼、ゾンホの集まりに頻繁に参加。VVAは、不適切なことを言う、という評判は少なかった。

23) N3 VT老人は、小ホは亭へ行かない、と話した一人であるが、この年、「本当に珍しくむら祭りに顔を出した」と息子が話していたケースもある。

・名簿揭示

陰暦1月4日(むら祭りの5日前)、亭にむら祭り役割分担一覧が揭示された。タイトルは、「戊寅年1月10日祭礼における御輿奉事各位名簿」であった。各班名とメンバーの氏名などが列挙してあった²⁴⁾。全部で凡そ29ほどの小班・役割に分かれ、217名の名前があった(班長、起旨、沐浴班などの兼任は除いた数字)。詳細は注に示す²⁵⁾。

・名前変更の続出

名簿の揭示後、上から紙を貼った変更箇所がかなりみられた。3日後の場合、以下のように、計10箇所に変更がみられた。ホ別増減では、T(-2)、H(-1)、D(-2)、V(+3)、N(+1)。

神輿担ぎ班：3箇所、ホ別増減は、D→N。黄扇持ち：1箇所、T→V。剣持ち：1箇所、H→白紙。八表持ち：1箇所、T→V。六部持ち：2箇所、D→N。横扁持ち：1箇所、N→V。走傘持ち：1箇所、なし。旗持ち：1箇所、白紙。

5日後さらに以下の計8箇所、ホ別増減でT(-1)、H(0)、D(+2)、V(+1)の変更があった。

24) 作成主体については以下のような予測があり、確認を怠ってしまった。名簿中の名前の記述の仕方から、具体的には、祭礼班のみ敬称略・付加情報なしのフルネームであること、加えて、その他の各班において、anh Nam ong Sauのように、子供+親のような記述がほとんどであり、その親族呼称の使われ方などから、主体が祭礼班であることが推測できる。さらには、この間祭礼班が一同に介して、協議したという話は聞かれなかったため、実際に大枠を決めていったのは、亭で最も日常的に話しをしているニャットさんとハイさんが中心となって、あるいはほぼ毎朝亭に三々五々顔を出す、トゥーさん、ナムさん、バーさんおよびTVThあたりであろうと思われる。

25) 以下の表記は、班名、(あれば班長名、全体の人数、大ホの人数、小ホの人数、天下人の人数)の順となっている。大ホはT、小ホはN、Ti、天下人(T, H, D, V, N, Ti以外)という3つを目安とした。祭礼班(18名, 6, 2, 0)、沐浴班3(3名, 0, 0, 0)、接礼班1(VVH, 15名, 2, 3, 3)、神輿担ぎ班phu gia kieu(N1VC, 16名, 1, 4, 0)、神輿のための扇持ちruoc quat kieu(4名, 1, 1, 0)、黄扇持ちruoc quat vang(2名, 1, 0, 0)、剣持ちruoc kiem(3名, 1, 0, 0)、接礼班2(5名, 0, 0, 1)、香案担ぎ班ban phu gia huong an(起旨1名, 8名, 2, 0, 1)、高齢女性接客班ban tiep khach cu ba(34名, 女性は多くが通名のみで姓の表記がなく不明。以下同様)、八表持ちruoc bat bieu(8名, 2, 0, 0)、送旗tong co(3名, 0, 1, 0)、楽班ban nhac(6名, 1, 1, 1)、照明班ban anh sang, 楽器(4名, 1, 1, 0)、六部持ち(12名, 2, 2, 0)、龍、獅子担ぎruoc giong, su tu(14名, 2, 0, 0)、横扁持ちruoc bien(VVA, 0, 0, 0)、ヴィア旗持ちruoc co via(3名, 0, 1, 0)、傘持ちruoc long(1名, 3, 3, 0)、走傘持ちruoc Tan Tau(8名, 0, 1, 0)、ジウ傘持ちruoc Tan Rieu(2名, 0, 1, 0)、旗持ちruoc co(12名, 0, 6, 1)、主太鼓trong ca(1名, 0, 1, 0)、太鼓持ち(2名, 0, 0, 0)、鉦(1名, 0, 1, 0)、龍庭担ぎruoc Long dinh(起旨1名、女官20名、女性のため不明)、鉦持ち(2名, 0, 0, 1)、修礼班ban tu le(班長1名、14名、女性のため不明)。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

神輿担ぎ班：2箇所、H→D。剣持ち：1箇所、白紙→H。楽隊：1箇所、T→D。八表持ち：1箇所、なし。六部持ち：1箇所、なし。旗持ち：2箇所、白紙→V。

(息子が黄扇持ちであったがVへ変更している) TVBに質問したところ、「昔は重いものを担ぐのは小ホの連中だった。今でもやりたくない。忙しいとか別の理由をつけて断るのは当然²⁶⁾。」と話されたので、むらで周辺的な位置にある天下人(外部の出身者)、むらの入り婿(Yむらの女性と結婚した移入者)²⁷⁾がどこに名前があがっているか何人かに聞いてみた²⁸⁾。また、神輿行列の最中にある人から、「あの重要な旗3本(役割分担表における送旗)は、大きなゾンホ3つの代表が持っているのだ」という説明も聞かれた。

・名簿の若干の分析

まず、上述した聞き取りによって、天下人、入り婿として挙げられたのは、次の5名であった。龍・獅子担ぎに1名(本人がナムハ出身)、旗持ちに3名(1. 本人が入り婿、2. 父がむらの養子、3. 衝鋒に行った先でもうけた私生児)、鉦持ちに1名(本人がタインチー県リンナム出身)。

次に、(同姓でも別々のゾンホがあり表のみでは不詳なので、あくまで目安に過ぎないが)各班における大ホ、小ホ、天下人の割合を注に示すので参照されたい。それぞれの全体総数は、大ホ(ホTのみ)が26人、小ホ(N, Ti)が28人、天下人(T, H, D, V, N, Ti以外)が8人であった。注目すべき点は以下の通りである。なお以下は揭示直後、変更前の名簿に基づく分析である。

- ① 太鼓担ぎに小ホ、天下人が多い点
- ② 1956年にむらが熱狂的に受け入れたディエンビエンフー帰還兵3人(普段も割合積極的に亭の活動などに参加している)が、接礼班(かつ名簿の上位)に入っている点
- ③ むらの外部(むらに割合近い大通り)に住みながら、亭、廟へ割合大口の寄付を行い、亭の活動などに積極的に参加もしているVVAに一人だけの役ruoc bienが

26) もちろん、じっさいに忙しいという場合もあるだろう。変更を願い出た人への聞き取りはできなかった。

27) 小ホの参加様態についても調べるべきであったが、天下人、入り婿により一層典型的な形で現れているとの考えもあり、不詳である。Yむらの天下人、入り婿をめぐる若干の動向については(比留間1998)を参照。

28) ただし、VVT一家(かつての祭主VVBの長男。筆者の下宿先)で、欠員の穴埋めとして回ってきた八表持ちを長男、旗持ちを次男が務めたが、とくに嫌がる風ではなかった。そのようなケースも少なくないであろう。

割り与えられている点

- ④ 上述した「大きい3つのホが持つ」と説明があったのは「剣持ち」であり、V, H, Tであった点
- ⑤ その他、本稿の主題と直接関係の薄いものについては注に示した²⁹⁾。

・祭礼班（全体を実際に主導する立場にある）の若干の分析

祭礼班は以下の18名であった（通し番号は名簿の記載順を反映している。最後のT iTのみ女性）。

ニャットさんHCP(1)、ハイさんTVT(2)、バーさんDTB(3)、トゥーさんVVH(4)、ナムさんHVK(5)、TVB(6)、TBP(7)、VVN(8)、TVTh(9)、N 1 VC(10)、DVB(11)、D 2 VU(12)、HVC 1 (13)、HVC 2 (14)、N 2 VH(15)、VVP(16)、TVS(17)、TtT(18)

重要な主たる特徴や背景は以下の通りである。また祭礼班メンバーがむら祭りで実際にどのような役割を果たしたかについても参照されたい（次節後述）。

- ① 18名中、大ホが15名。内訳は、T 6名、H 4名、D 2名、V 3名。小ホは3名。小ホの担当などについては次の通り。N 1 VCは神輿の起旨（指揮役）。普段は埋葬地管理人であり、むらの葬送の棺桶担ぎでも起旨を務めている。D 2 VUは照明、音楽担当。普段からむらの電気隊長でもある。N 1 VC、D 2 VUの2名は高齢者の会執行班でもある。N 2 VHは獅子舞、龍舞の指導者である。
- ② 年齢について、(1)~(11)は70代、(12)~(15)は60代、(16)~(18)は50代。ただし、必ずしも年齢順ではない。50代は、VVPは村長、TVSはおそらくソム長ゆえの選出、Ti Tは社・祖国戦線主席。
- ③ 祭礼リーダーたち（(1)~(5)）は、功德に対して、たいてい標準か、それより少し大目に拠出しているが、決して大口の寄付者ではない。たとえば、亭の再建（亭内部の壁にはめ込まれた数枚の大きな碑文に数百人の寄付者の名前が刻まれている）に対しては、100,000ドンである。それより一桁多い寄付者も散見される。
- ④ 一般にYむらでは、村内婚の結果「マー草の根」day mo re maのような入り組んだ親戚ho hang関係でつながっているとされるが、祭礼班のうちリーダー層(1)~(5)の間にも、以下のような関係がみられる。

29) ①祭礼班メンバーがその他の小班を主要な役を担っており、また小班メンバーとなっている祭礼班メンバーの家族が少なくない。つまり、祭礼班メンバーは家族ぐるみで祭礼に大きな貢献を果たしている。②「修礼班」つまり、礼物の用意を担う人々のほとんど（11名ほど）は婦人会メンバーであること等がある。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

- ・ ハイさんとトゥーさんの間、ニャットさんとサウさん（建設班）の間に、「^{トンザー}通家」関係（子供同士が夫婦）がある。バーさんは、「ニャットさんとサウさんは通家なのにやたらと仲が悪い」と表現した。
- ・ ニャットさんとナムさんは同じホHであるに留まるが、バーさんとサウさん（建設班）の間には同じホDであることに加え、妻が姉妹anh em dong haoという親しい間柄をも有する。

(2) 観察に基づく1998年のむら祭り

以下は筆者が知り得たむら祭りの様子に関する記述である。観察していない場面は〈 〉に、補足説明、むら祭り以外の行事などは（ ）に入れた。とくに祭礼班メンバーの動きを明示するようにした（適宜祭礼班通し番号で表記する）。

陰暦12/13 むらの守護神の生誕日、午前中、亭にて来年50歳になる男女が亭へ礼物を持参し、礼拝し、集まった長老たちに年寄り入りの報告、「祭」儀礼（祭主ニャットさん、祭文DVB。以下祭文はDVB）後、簡単な受禄（供え物の飲食）、その後、話し合いが行われた。ニャットさんから来年のむら祭りで神輿行列を行うこと等の報告、協議がなされ、また最近の寄進者に対して皆から拍手が送られた。

〈12/26 門の修復の完了式〉

〈12/27 ハイさん、HVC、ナムさんの3人が、年閉めの儀礼le tat nienに参加するためボンライへ行った〉

〈12/28 廟にカウドイが取り付けられた〉

12/30 夜、社・村の幹部らの一行（社・党書記以外の次はYむらの人。ニャットさん、(7), (9), (10), (12), (14), (16), (17), (18)、社副主席、合作社村・主任ほか）が亭、寺で参拝。亭では社党書記と堂守ハイさんが新年の祝福の挨拶を交わした。その後、むらの事務所の2階会場で、年閉めの会合が開かれた。社副主席、社党書記のスピーチに次いで、ニャットさんがむら祭りで神輿行列を行う旨などの報告後、自作の詩を読んだ。

除夜 亭にて、7, 8人の長老（祭主ニャットさん、ハイさん、トゥーさん、ナムさん、(7), (10), 祭文DVB(11)ら）で、^{ザオトウフ}交承の「祭」儀礼が執り行われた。

1/1 亭はこの日から10日まで門開き。

1/4 神輿むら祭り役割分担表が亭に掲示された。夜、亭にて祭礼班数名（TtTh

含む)と、神輿担ぎ班ban phu giaの壮年男性たち(ニャットさんが名簿でその出欠を確認)が打ち合わせ。

- 1/5 〈夜、亭にて、祭具担ぎ班ban lo boが打ち合わせ〉
- 1/6 亭にて、朝、高寿祝いが開催され、高寿者に赤い冠などが贈られた。女性高齢者が多数が参加。ナムさんが司会。ニャットさんからYむらの高寿者数などの報告があり、副主席とともに隣村から来た社常務委員のスピーチ・高齢者の会Tむら会長兼詩歌クラブ会長の詩朗読の後、高齢者の会・社主席トウーさんから高寿者に贈物が手渡された(途中からTiThも参加)。(多くのゾンホやゾンホの支派単位が墓参り)
- 1/8 亭にて祭具掃除、昼過ぎから神輿担ぎの予行練習が行われた。グラウンドではサッカーの試合が行われた。(家族単位の高寿祝いがこの日に集中)
- 1/9 むら祭り初日。亭にて、政権(村の幹部たち)に続き、祭主ニャットさん以下各小班の礼拝、祭主が香炉を龍庭に載せ、亭から廟へ神輿を担ぎ入れる。廟にて、祭主ニャットさん以下、小班の礼拝が次の順序で次々と行われた。祭主→祭班(高齢男性)→神輿担ぎ(30, 40代男性)→青年たちの集団→龍庭班(若い娘たち)→高齢女性→子供たち(男子の太鼓と女子の扇踊り、少女のシンティエン踊りの奉納も)。廟にて「祭」儀礼(祭主バーさん)、捧香による儀礼が続けて行われた。夜にかけて、人びとがひっきりなしに功德、礼拝に廟を訪れる。むら人のみではなく、そのなかには、むらの地分内の縫製会社の一行の姿なども見られた。夜、「祭」儀礼(祭主バーさん)。その後、「沐浴」(神の衣冠を着せた椅子、龍椅を降ろして衣冠などを整える)。その後、受禄、話し合い。とくに神輿行列における龍庭の順序(何と何の間か)をめぐって、多人数が様々な意見を述べ、話し合いは12時過ぎまで長時間に及んだ。
- 1/10 朝から、廟から亭へ龍椅をのせた神輿担ぎ。村長VVPが行列の最後尾にいる。行列はむらの外周をゆっくりと進んでいく。行列の沿道に大勢の見物人が詰め掛け、昨日同様、沿道に面した館、家や路地ngoの出入り口にしばしば供え物の置かれた机が設置され、女性が神輿に合掌し、子供たちも繰り出している。とくに高齢女性たちは神輿に対して、神妙な様子でしきりに合掌する。神輿の通り道のいくつかの家は、個別に、龍、獅子舞を庭に招きいれてお礼を支払う。神輿が大勢で混雑している亭に到着。亭のなかへ神輿に続き、祭主バーさんが香炉を運び入れる。「入席礼」の「祭」儀礼(祭主ニャット

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

トさん) 後、捧香儀礼が執り行われた。夜になって、「祭」儀礼、主に婦人会の面々による^ムロウソク^ア灯り^デ踊、中高年女性有志によるチェオ（大衆演劇、題材は「^{クアンナム ティキン}観音氏経」の一場面）が行われた。亭は、老若男女大勢の見物人で立錫の余地もないほどであった。こうした賑わいだけをみていると、何の役割にせよ、祭りの衣装を着て参加すること自体には選ばれた人という名誉が強く表出されているように思われた。

- 1/11 <「祭」儀礼> (ホDの墓参り、忌祭) <新たに50, 70, 80代となった老人たちの^{ホイドンニエン}同年会主催のご馳走担ぎruoc co>
- 1/12 朝から、亭から廟へ神輿を担ぎ戻すruoc ve。ニャットさん、NVC、DVB、ナムさんらが指示を出す姿が目立つ。人びとが合掌するなか、祭主ニャットさんが廟のなかへ勅封箱を運び入れ、祭壇手前でバーさんに手渡す。バーさんが箱や香炉を壇上に設置。ニャットさん、ハイさん以下、拝礼、踊りの奉納が行われた。「^{スアットティック}出席礼」の「祭」儀礼が執り行われた。(むらのグラウンドでは、ソム別チームでのサッカー大会)
- 1/13 夜、亭にて、「^{トンケット}総括」の反省会がおこなわれた。高齢女性、小班の中年女性らも参加。祖国戦線TtTのスピーチ後、この間の話し合いのなかで最も多数が発言した。

4. 若干の考察と問題点

総じて言えば、本稿の具体的記述は、未成の指摘を補充するのみならず、ベトナムの村落研究史上、1つの新たな問題提起を示唆するものとしての意義があると考えられる。

つまり第一に、決して有名な伝統村ではないYむらにおいても、ゾンホが村落祭祀の面で、これまで、そしていまもお影を落としている様子が浮き彫りになったのではないかと思う。ただし次の点に留意することも重要である。人びとが率直に意見を交わす姿は確かに強い印象を与えるものである (Malarney2002) (Kleinen1999) が、ことむらにおけるゾンホや他のゾンホのことについてはセンシティブな態度が目立ち、表立った発言は控えられ、よしゾンホが何かの理由にされとしても、それはあくまで副次的な性格を帯びたものである。要するにYむらの事例からは、少なくとも次のようには言えるのではないか。ゾンホは、ここ100年という単位からむらの人びとの意識や行動を理解するうえで、やはり不可欠なバックグラウンドの1つである、と。

第二にこのことは、次のようなもう1つの問題提起を示唆していると思われる。Yむらの別の隣むらに、TLむらがある。有名なNSというゾンホがあり、その立派な祠堂もある。またいち早く村祭りの認定、復活もみられた(1985年という)、という話をYむらの人から聞いた。裏付けは欠くが、ここから次の示唆が導き出されるのではないか。即ち、これまでは北部、南部、中部、または、むらの偏差のみが指摘されてきたが、こうしたレベル(地域社会とでもよびうる)での地域の偏差が見落とされていたのではなかろうか、と。

地域社会とよびうるもの、むらの外部世界との関係、その他1992年から試験的に導入された村長、ソム長制度などむら祭り復活の諸背景についても論及すべきであったが、今後の課題として他日を期したい。

[謝辞] 本稿の執筆に際しては、Yむらの人びとはもとより、多くの人に助言や教示をいただいた。とりわけ東南アジア史学会関西例会(1998年10月17日、大阪市立大学文化交流センター)において参加者の方々に貴重なコメントをいただいた。この場でお礼を言いたい。

ベトナム北部・Yむらにおけるむら祭りと父系親族集団の変遷

資料

表1 郷約におけるむら祭りとゾンホに関連する記載

当該郷約の梗概	1916年。政治9条、風俗14条。全体で33頁（条項のみの全体行数は161行）。	1928年。1916年の一部改定版。風俗5条、政治1条。全体で14頁（条項のみの全体行数は54行）
村祭りに関連する記載（内容を筆者が要約したもの）	風俗に計6条あり。括弧内は行数（以下、同様）。 第1条 神祭りの日取り・日数（3行） 第2条 迎神等のための道の補修を八甲が分担他（5行） 第3条 寺の補修のための費用出所他（5行） 第4条 祭主の選出（8行） 第5条 亭の中での順位（8行） 第6条 祭官の服装や立ち居振る舞い他（4行）	風俗に計3条。 ・祭主の選出（13行） ・亭の中での順位（15行） *この変更内容で、とくに本稿に関連する内容は、この表の下記の欄を参照。 ・八甲の担う当直の具体的役割に関する付記他（12行）
ゾンホに関連する記載	<ul style="list-style-type: none"> ・政治第1条「会同選出」に次の記載あり。各ホは会同に入る族表を選出する。任期は3年、再選可。 ・同様に政治第3条に。族表に年給2ドンが支払われる。 ・風俗第5条「亭のなかでの順位」のなかに、族表の座次およびそれに伴う納付金額（2ドン）に関する記載あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風俗「亭のなかでの順位」に次の記載あり。白丁（無爵位、無役職）族表は、座次の2ドンに加え、15ドン納付してはじめて、耆役（爵位、役職者）座席に参加することができる。 ・風俗の条「長寿祝い」（12行）に、（1916郷約における、村祭りが始まった亭で、神輿を担ぎ入れた後にお祝いする形式から）会同の選出した族表が長老たちの家を訪問して祝いの品を渡すことへ変更する。

次の表2について、H, D, Vに関しては（わずかではあろうが）小さいホが混在している、またホNも同姓で別のホである可能性があるため、この表の数値はあくまで目安に過ぎないことを断っておく。

表2 郷約の巻末に記載された連名のゾンホ別人数

	1916	1928	1934a	1934b	ホ別数
T	19	13	4	3	39
H	17	10	6	3	36
D	11	5	2	2	20
V	7	7	3	1	18
N	3	0	2	1	6
Ti	2	0	2	0	4
その他	0	0	1	0	1
年別数	59	35	20	10	総数124

参考文献

- 比留間洋一、1998「入夏儀礼について—現代ベトナム村落における革命と伝統」『東洋文化』78号、東京大学東洋文化研究所、99-110。
- 比留間洋一訳（著者不明）、1999「改良郷約マニュアル」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1号、382-395。
- Kleinen, John, 1999 *Facing the future, reviving the past : a study of social change in a Northern Vietnamese village*, Institute of Southeast Asian Studies .
- Malarney, Shaun Kingsley, 2002, *Culture, Ritual and Revolution in Vietnam*, RoutledgeCurzon.
- 松平誠編、1990『伝統祝祭にみるベトナムの文化復興』（平成8～10年度科研費報告書）女子栄養大学松平研究室。
- 宮沢千尋、1999「ベトナム北部の父系親族集団の一事例—儒教的規範と実態」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1号、7-33。
- 中西裕二、1998「世帯を通して見たベトナム南部村落における親族の位置づけ」『東洋文化』78号、東京大学東洋文化研究所、13-38。
- 嶋尾稔、2000「十九世紀—二〇世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」吉原和男、鈴木正崇、末成道男編『「血縁」の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社、213-254。
- 末成道男、1996「甲についての覚書」末成道男編『人類学からみたベトナム社会の基礎的研究—社会構造と社会変動の理論的検討』（平成6・7年度科研費報告書）、東京大学東洋文化研究所・末成研究室
- 末成道男、1998『ベトナムの祖先祭祀：潮曲の社会生活』、風響社
- 住村欣範、2000「ホー伯父さんを担ぐ：ベトナム北部農村における「ホー・チ・ミン」の意味についての覚え書き」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』2号、241-250。